

には奉仕隊員から移った柳井久傳、甲斐一馬、あるいは義勇隊員出身の高橋正道、辨筆所勤務を交代した市原福太郎といった、元気のよい独身の四員達が入ることになった。

細谷は、国の東側の境界線に近い川岸にあるかなり大きい集落で、空力鑛に通ずる近道の出口にあり、長瀬子にも比較的近く、畑の地味も良格であった。ここには郭牛園にいた清田光之、所質俊平、太平山にいた若林平太郎、大榎樹にいた柳井潔などが移り、自立した。

また納海と本部の中間にある西馬家には、新しく入った川野相蔵、片田治人などの津久見組と、柴田千代助、三浦実などの中野組が移り住んだ。

佐伯市から入った近藤義夫、吉川生乙、天野隆といった人達は、一時四無樹の本部にいたが、後に長瀬子に移動した。

こうして昭和十八年に入り、国は着実に前進を続けられた。

満州依伯村開拓団おぼえ書について (相栄 弘)

満州開拓団や開拓青少年義勇軍のことは、日本民族の海外発展の大道として、国策として打出されたもので、結局戦いに敗れて、すべてはご破算になり、命あつて故郷に帰っても、報いられるところはないとなく、気の毒な限りであった。

私はその送出し当り、村当局の協力し、直接義勇軍参加に協力している。今思い返して見てやはり心苦しい。結果論的に仕方がないなど言つて、痛いところばかりでない、そんな気持ちでなく、今から南方の島々に遺骨を拾う方々に通ずる気持ちから、苦勞して結局報おれなかつた人々のあつたことを忘れられない。なせかなら今も痛い思い出をもつ方々は大聲いらつしやるから。

記録

わがふるさと 元田 慈

— すぐれた人々 —

会員 市野 瀨 仁

人物について、故人から選ぶことにした。その中で二つの立場を考えた。一つは元田に長く住まなくとも、世に名を留めし、人の為に貢献した方を取上げることとした。今一つは元田に長く住み世の中に知られなくとも、人間の生き方として、人の範となる方々をのせることにした。

従つて一方に学者あり、僧侶あり、村の政治家あり、あるいは田舎の芸術家があるかと思えば、個性のある一家の戸主であり、主婦である人々を公平に取り上げたいことを諒とせられたい。

市野 瀨 平 太郎

平太郎は、依伯市城南區在住の市野瀨文雄氏の曾祖父にあたる人である。明治維新によつて庄屋の制度は廢止されたが、村を治める長として変りはなかつた。史料に一文久三亥三月十四日 役儀相續 明治五十四年四月十三日 副巨長拜命ス」とある。また弥生町役場の記録に、初代村長として二期務めたことが記されている。

平太郎がどんな人柄で、どんな業績があつたか分らない。ただ植松の下の金馬橋の碑に、彼の名前があることに注目したい。略成少し余談になるが、金馬橋について

医師益田孝氏の説を聞く。

「碑文のある橋は珍らしい。しかもその碑文は、佐伯藩助教の要職に在った新進気鋭の漢学者、水筑新士(後年の秋月新太郎)の撰書である。」

現在の金馬橋は河川改修工事の一端として、大分県の直轄でかけ替えられた鉄筋コンクリートの近代的な橋であって、何も取立てていう程の珍らしい橋ではない。然し交通不便だった明治初年に、恒久的な立派な石橋で、而も柱を用いない珍らしい形の橋へいわゆる(眼鏡橋)を作ったのであるから、世人の眼を驚かすのに充分な橋だった筈である。

橋を作ったのは高司佐平という所賀村の一農夫で、世人の不便を除かんが為に、多額の費用を投じて独力で架けたのであるから、その大きな功績をたたえる意図と両々相俟って、秋月先生をして此の碑文を書かしたためたものと解される。(以下略)

なおこの碑の西面には、讀み下し文になおすと次のように刻まれている。  
「佐平の志固きは嘉すべきなり。周旋事を勤くる者亦其名を没すべからず。因りて後に連署し以て永世に伝え来る者に示告す」

大里正 市野瀬平太郎

宮下 市郎兵衛 文右衛門

里正 尺間 早 助 長 助

空齋 源 平 衛 地目付 長 右 五 門

八戸 清主衛門 今右工門

明治三年庚午 施石者 宮下伝左衛門

以上の碑文によると、明治三年頃までは大里正として村を治めていた平太郎が、村におきた佐平の美筆の碑文を、佐伯に住む秋月先生に書かしめたことは、平太郎自

身の意志によるものと考えらる。

初代村長として平太郎のした仕事は、今のところこれ以外に分っていない。明治三十二年没す。六十五歳。

### 市野瀬 潜

一生をくすりにとどげ老の秋 又 水

この句は潜が、日本新薬会社創立二十五周年記念式の時に作ったものであって、天氷と反故輝の尺間山と井野川をとり合あしてつけた字である。「日本人の飲む薬は日本人の手でつくりたい」と、文字通り一生を薬にささげた人であった。

彼は市野瀬平太郎の四男に生れ、兄弟中でも頭の良いたんとなく余裕のある子であった。彼は十六歳の時京都に上ってから、一生京都で暮らした人であった。

「明治四十四年十一月、京都市下京区唐戸鼻所の京都薬業界の名門『鐵田自然堂』の一節に、『京都新薬堂』のま新しい看板を掲げて、一つの薬舗が店開きした。堂主は市野瀬潜であった。

この「京都新薬堂」こそ、こんにち、わが國製薬業界の時々な存在として、隆々たる發展を遂げる「日本新薬」のそのその源流である。

これよりさき彼は、明治三十年三月東京上野私立薬学校を二番の成績で卒業し、同年六月は務省薬劑師試験に合格した。(日本新薬編、カイヤネ社)

以後、潜の生涯を知るには「現代薬の概観」(春木一夫著)と、「日本新薬」編ダイヤモンド社の二冊の書物がある。この書物の中から潜の晩年譜を作つて友人のが上記に示したものである。

一寒村の小さな部落から日本一流の新薬会社を設立し、

日本人で薬を作りたいという執念と一生燃一つづけて、  
数多くの新薬品を生みだした彼の才能と業績は、郷土の  
誇りとするとともにある。

彼は創立者によく見られるように、薬の開発をした科  
学者であり、日本新薬会社創設の組織者、経営者であり、  
海外にも製品を売りこむ大商人であるように、多方面に  
わたって活躍した。

ながて日本にないサントニン（蛔虫駆除薬）の開発  
に情熱をそそぎ、国産化に成功したことは、生涯最大の  
功績であつた。サントニンの原草は、ソ連領の中央アジア  
に多く産し、ドイツ・フランス・リトアニア・インド  
・北アメリカ等はいくらか産すること、薬学界にも知  
られていた。しかし日本の誰一人として、日本の土地に  
蕪草の栽培に成功した人はいなかつた。彼が成功したき  
つかけは、スエーデンのストックホルムにいた親戚にお  
たる外交官、出納功（弥生所上小倉出身）に西改でサン  
トニン原草の種を見つけて送ってもらふことを依頼した。  
やがてわずかの種子が送られて、高田桂枝師と共にその  
種子を成長させたのである。

彼がサントニン発見を追い求めていた時、自ら人体実  
験を試みたことが有名な話となつてゐる。その時、  
「黄色だ、電灯の方からも、君の実験衣もみな黄色だ。ま  
ちがいない。本物のサントニンだ」と頑強に叫んだ。こ  
れが因産始めてのサントニン誕生の一瞬である。」と記録  
されてゐる。

彼は進取の気象に富み、命がけて仕事に打ちこみ、意  
志の強い方であつたが、怒つた顔を見たことかかないと云  
われな程、おだやかなやさしい人であつた。それでいて  
社員はこわかつたという。

彼は庄屋の家生れの、育ちの良きから謙虚な人極であ

つた。こんな例がある。

大正八年、日本新薬株式会社創立にあたり、重務取締役  
役口就任したか、けつして社長にならうとしなかつた。  
また一つには、昭和十一年第二日本新薬設立案が重役会  
で否決されたとき、協力された方に申訳ないとして、証  
拠金の金利をつけて返却した等、いまだ例のない良心的  
な処置を取つたことが、語り草となつてゐる。

こうした人極は、潜の俳句の世界にも見るこゝが、き  
る。彼は俳壇で名あるグループに属し、入選した数々の  
名句を残してゐる。

住み古りて三十とせあまり路地の菊

秋居はよ、いしての句

秋天に乏しき花のみよもよぎ

サントニンを食んだみよもよぎもほん  
のわずかしが花と誤かしてくれな  
希望と失望の交錯した心境

一々の巾かりの笠に詣でけり

日本中、サントニンを食んだよもよぎを  
探し求めた苦衷の句

右枕をまくらや虫浄土

穉世の句 七十歳

市野瀬 潜 略年譜

- 明治十二年四月 市野瀬平太郎四男に生まる
- 二十七年 十六才で単身上京
- 三十年三月 東京私立薬学校卒業
- 三十六年三月 京都の名門茶舗織田自然堂
- 三十七年 元京都府薬劑師会会頭小泉俊太郎長女政子と結婚
- 四十三年 「常用新薬集」発行
- 大正四一五年 鎮靜劑「ハロパリン」、皮膚薬「ビチロ

「ル」の企業化

大正八年十月

日本新葉株式会社創立 取締役就任  
中国を視察し藥品輸出の糸口をつくる

昭和元年

京都茶劑師会会長に選ばれる  
「サントニン」を日本で初めて栽培す  
ることに成功した。その地名はちな  
み「みぶよもぎ」と命名した

四年

俳句誌「ホトトギス」に入選  
京都御所で「みぶよもぎ」と天皇に供す

六年

日本新葉株式会社社長に就任

八年

朝鮮、満州に「みぶよもぎ」を栽培す

十一年

日本新葉株式会社設立

十六年

日本新葉 会長に就任

十九年

七十才で死去

二十一年

七十才で死去

二十三年

七十才で死去

兒 玉 翁 治

翁治は兒玉家の四代で、輝喜の祖父に当る人である。彼は御嶽家から兒玉家に養子に來た人で、庄屋の子孫にふさわしく、性格はまことに大らかであった。一見風変わりなところもたが、反面綿密な計算をもつた人物であった。

養父の利佐がハイカラで几帳面な性格が気に入らなかつたのか、川登の方に一時蒸察したり、お坊さんの後を歩くことと好んだり、風石に入るのは鳥の行水がように早かつたり、教への奇行の持主であった。そんな翁治が明治十年頃、お城のような現在の兒玉邸を作つたのであるから、凡人とは思えない。

兒玉邸は百年を越しても、今なお堂々とし左構えを維持してあり、内部はいかに及ぶず、石垣といわず段岡といわず、建設上からも価値あるものと推定される。

さきの「神武さん」のところでも述べたように、彼は部長の報酬とすんで中山の頂上は神武さんをお祭することには抜け出し、村人をリードし協力を得た。こうした村のため、社会奉仕の精神も、彼の日頃の行状からして純粋であったことかうかがえる。彼の風貌と行為は大人風の風格をそなえており、今の人には見られないタイプの人物であった。明治三十一年没す。

兒 玉 倉 考

倉考は輝喜と兄弟でその末弟にあたり、村の松本哲男と同級生である。倉考は子供の頃から、ゆりかかったこととゆり通すという、ぬぼり強い性格の人であった。

彼は堅田村の殿調高畑家に養子に行つたが、故あって縁故先の小倉に住む高島易藏の許に暮らした。彼は漢学者すかれた教師の感化によつて、何事とも燃やした。

後佐伯に帰り佐伯中学校(現鶴城高校)に入學、五年の時、山口高等學校と札幌の北海道帝國大學予科畜産科の二つとも合格した。

彼倉考がどんなな人生軌跡を歩いたかは、後に掲げる略歴によつてほぼ知ることができるが、彼の弟子に当る同大畜獸医学部教授工藤規雄の追悼文によつて、その業績なり人柄をくわしく知ることが出来る。

倉考は昭和十九年八月「馬の蹄帯並に膝部に關する研究」により、獸医学博士の学位を授けられた。それまで寄生虫學、毛皮動物疾病學、同繁殖生理學、血管解剖學等、四十年にわたる研究生活の業績は、百數十篇に亘つてゐる。

倉考は研究者の心構えとして、「大きな水程大きな根を張り、大きな枝を伸ばすが、それによつて中心となる

幹はますます水くたくましくなる。しかし決して枝が幹になつてはいけない。研究を進める上では広く枝を伸ばして知識を吸収すべきだが、自分の研究の本幹は決して忘れないように」と説いた。また、解剖手技については「メスを入れるべき方向が定まるまではよく考え、正と度方針が決つたら思い切ってメスを使え」と指導された。かつて弟子たちが、先生の解剖学に入られた動物をうかがつたところ、「子供の頃から動物心理学に興味をもつていたが、生涯の夢としてサルの多く集んでいる山奥に入り、彼等の友人となつて、彼等の意志交換の様子を学んでみたいが、その道程の一つとして解剖学を学んでいる」と話した。

こうした口マンテイツクな人柄は、祖父角治に似たとこもあつて、血は争えないとの感じさせる。兒玉郎の仏壇の上は掲げられてゐる角治・利喜藏・倉秀三人の写真を見ると、一層その感を深くする。

不幸にして、頸椎カリエス後遺症による運動障害のため痲痺に臥したが、二人の息子の玉節にみとられながら世界されたのである。こうした境遇は普通の家庭では、願つてもかなえないことである。

高柳倉秀 略歴

- 明治三十四年一月 南海郡郡明治村元田に生まる
- 大正十四年三月 北海道帝國大学農学部畜産学科卒業
- 大正十四年七月より同大学勤務、馬手講師、助教歴任
- 昭和十三年五月 滿州國奉天農業大学教授
- 十九年三月 台北帝國大学教授
- 廿一年十二月 北海道帝國大学教授
- 四十七年十一月 鮎二學端空章
- 四十九年十一月二十日 逝去 享年七十三才

川 野 春 芳

竹ノ原の一番上には川野佐喜光と、川野晋の先祖の家が二軒並んでいた。

佐喜光の曾祖父にあたる孫五郎の四男は、春芳(春芳は僧名)といふ青年があつた。隣りの川野(晋の先祖)にも、同じ頃の青年が毎日毎日下から石を運び上げて、家の付近の石垣を構築しては、島地を作らされた。二人はいつ衆てるともないこの仕事に見切りをつけて、僧になることを誓ひ、青雲の志を抱いて京に登つた。

二人は修業を終えて、春芳は佐伯市内の潮谷寺に、友成尺間の西音寺の門に入り、それぞれ志を上げ、一寺の住職を務めて一生終つた。

竹ノ原の墓地には、電球型の丸いお墓が一基、人目を引いたものであつたが、これが春芳僧の墓であつた。

川野晋の先祖の方は、西音寺から宮崎県の日向市仙光寺の住職となり、時おり元田に帰ることもあつたが、川野晋の家が家族と共にどつた写真を見ると、晋の祖父衛吉の顔と大きく似たような人に見える。残念ではあるが、それ以外のことは分らない。

一方春芳は、佐伯の潮谷寺二十七世の住職となり、三人の先輩住職と合葬された墓がある。享年六十歳。潮谷寺第二十九世に当る老僧英俊(九十七歳)は、春芳の面影をこう語つてくれた。

「彼は低かつたが横の長つた人で、性格はきわめてあつさりして、一生独身を遁した方であつた。」

佐喜光の家には、春芳和尚が隠居したとき、同僚の俳句の寄せ書きが残つていて、往時の面影を偲びせている。二軒並んで育つた二人の青年が、同じ志を抱いて二人とも住職となつたことを思い合わせると、時の世相と同

時に、二人の才能と修行のたまものであり、初志を貫徹したことを範として、後世に伝えるものである。

山中元吉

元吉は、明治十三年十一月二十九日に生まれ、昭和十八年二月十八日に物故し、六十二歳の生涯を終った。

彼は福岡県小倉の城野の連隊に入隊した。射撃の技術が抜群であったためか、千葉県習志野の戸山学校に転属になり、軍神橋中佐の指導を受けた。

日露戦争に従軍するや、奉天附近の戦で、右足の大靭部に貫通銃創を受けたため、膝がしら下から切断、左足は凍傷のため足首から切断した、重症の傷痍軍人となった。

彼が生きて帰ることができたのは、切畑村(現赤生町)提隊出身の古藤田伴次が、救護されていく多くの重傷者の中から、同郷の山中元吉を発見したことによる。

元吉は写真奥でもわかるように骨格が大きく、ななめ目、眉は一きわ太かったので、一見こわい感じの風貌であった。それがため、「明治村の鬼瓦」の三傑といわれたが、一徹なところがあつた反面、決まらずくやししい人柄であつた。

家は安藤信喜方の前で、たばこと文房具店を開いていたが、子供も大人も「元吉、元吉」と呼んで、店先に人の姿が絶えなかったことがなかつた。それは彼の人柄によるところが大きかったが、それだけではなかつた。彼は稀に見る器用人であつた。

春にむれば、荒木の山奥にメジロ様に登る。夜明けと同時に勝負するので、松葉杖の彼は、よほど早くから出かけねばならない。体が不自由なため、メジロをえんにつかせてからでないとい、つかまえることができなかつた。

家の中はいつもメジロが鳴き続けていたものだが、この中からコンクールで優勝をかちえたものがかなり出た。

夏になると、川を網で囲んでの釣かけである。尺間から元田の前の川原で、彼の釣かけの姿を見ない日は少い。その時、切断された足の痕跡がまざまざと見られた。

秋になると菊作りが始まる。またその作品が群を抜くほどだったのだ。村の愛好者は彼をたまたまかつた。ある時は暇をみてメジロ籠やうなぎ籠、魚籠や指物等の作つた数を知らない。とくに人形の作り、角の作り張り評判で、遠く佐伯地方からも買いに来た。

以上のような彼の趣味は、生計に大きく作用した。こころで彼の器用さが村に貢献したことを紹介しなくてはならない。それは愛宕神社の祭典に元田から出る獅子と尺間が使う鼻高面を作つて寄贈したことである。木製のものと違つて紙で造つたものであるから軽し、獅子の威厳は少しも遜色ないもので、今も使用してゐる。

元吉は尺間の出身である。彼は自分の祖先が尺間の神から巻物を授かつたが、食うことに困り要に替えて命を「念終起した。彼の器用さは村人も喜び、彼の人柄は人々に慕われた。

佐何市馬場込に住む長男山中陸次定に減る、元吉の遺る元吉の遺品の主なものに、金鷲勲章、勲八等功七級、戸山学校での「行状方正勤務勉勵学術優等」の賞状。射撃優勝メダル二箇等がある。その外、皇后陛下ご下賜の義足で生き抜いた元吉の一生には、悲壯感のみちんもな、むしろ自然とたおむれ楽しく遊んだように見え見えた。

こんな人を、村の英雄と呼んでみたい。(この項終り)